

オバマの自己欺瞞

【訳者注】自己欺瞞とも自己訓練とも言えるだろう。これまでの自分（自国）の罪状をそのまま並べ立て、「こういうことをする者は俺が許さない」とは、よほどの鉄面皮か、異常者でないと言えないだろう。オバマ氏はそういうことができるように、自己訓練したのだろう。これはオバマだけではない。ウクライナ・クーデタの工作者、ビクトリア・ヌーランド女史なども、あまりにも堂々とウソをつくので、それは「高貴なウソ」と呼ばれている。

愚弄ということが、イルミナティの際だった特徴だと、私は前に書いた。人間どもをコケにして快感を得るといえることがなければ、サタンに仕えることはできない。愚弄の例はいくらでもある。自然界のデザインを否定する趣旨の本に、「グランド・デザイン」という題をつける。米デンバー空港の不気味な壁画や彫像は愚弄である。ロンドン・オリンピックやスーパーボウルの余興のすべてが愚弄である。トニー・ブレアに対する「セイブ・ザ・チルドレン」の授賞は愚弄の最たるものである。そもそも9・11の計画の粗雑さと、いろんな形の予告は愚弄である。安倍さんに、「ポロシェンコに挨拶してこい」と言うのも愚弄である。国際的イベントの国連演説でも、聴衆を愚弄する意図があったと十分に考えられる。

沢山の評者が反応しているように、これに対するプーチンの、控えめだが急所を糾弾する言葉は鋭い。最後のこの評者の締めくくりもよく効いている。

By Joe Lauria

September 29, 2015, Consortiumnews.com

7か国に対する軍事攻撃を、命令したと言って自慢しているオバマ大統領は、ロシアと中国が、国際的振舞いのルールに従わないとって叱責した——偽善または自己欺瞞の、息を呑むような例である。



月曜日、国連総会会場で、バラク・オバマ大統領が、各国リーダーに対し、強い国家が自分の意志を、力づくで弱い国家に押しつけた、国連以前の時代に戻らないように警告したとき、あっけにとられた沈黙が流れた。彼が、「人類史でほとんど常に行われ、この機関の前の時代のものだったルールに戻ろうとしている」のは、ロシアと中国だと言ったとき、明らかに不信の空気が感じ取れた。

これら過去の時代のルールは、「力はゼロサム・ゲームだ、力のある者が正しい、強い国家はより弱い国家にその意志を押しつけねばならない、個人の権利は問題でない、激変の時代には命令は強制でなければならない、といった信念」だった。

この部屋に沈黙が流れたのは、オバマが他人のこのように言うすべてが、第二次大戦から今日までのアメリカの振舞いを、完全に描写するものだったからである。

1945 年以来、アメリカは、自分の支配に抵抗する主権国家の、何ダースもの記録された侵略と転覆に関わってきた——弱い者にその意志を軍事的に押しつける最強国として。最もよく知られたものとして、1953 年と 1954 年の、イランとグアテマラのクーデタ、それにベトナムとイラクの侵略がある。他に、民主主義が覆されて、王政や独裁性に代わった例としては、1961 年のコンゴのモブツ、1965 年のインドネシアのスハルト、1973 年のチリのピノチェトがいる。

https://contactmonkey.com/api/v1/tracker?cm_session=83aea5b1-63cf-44d1-9df2-179381224e0c&cm_type=link&cm_link=a7f516c3-1266-4fc4-ba4c-af1a83974005&cm_destination=http://thirdworldtraveler.com/Blum/US_Interventions/WBlumZ.html

ベトナムでの敗北とともに、アメリカの軍国主義者には逆風が吹いたが、10 年後にはロナルド・レーガンが戻ってきて、グレナダの小さな侵略を始めた。ジョージ・H・W・ブッシュは、1989 年にパナマを叩き、その後 1991 年には、空軍と地上作戦でイラク軍を壊滅させ、これが「我々は永久にベトナム症候群を払拭した」という宣言になった。ベトナムでの敗北から 30 年後、彼の息子ジョージ・W・ブッシュが、2003 年の大規模なイラク侵略という芝居を行い、歴史上最も恐ろしいテロ軍事力の行使された、完全な混乱状態をつくり出した。

にもかかわらず、オバマは月曜日、ワシントンが作り出した混乱を、ロシアと中国のせいにし、「いくつかの主要国は、国際法に抵触するようなやり方で、自己主張を行っています」と言った。オバマは、ロシアのクリミア“編入”と、東ウクライナへの“更なる侵入”に言

及した。

彼は、キエフの民主的に選ばれた大統領に対する、記録された、アメリカの采配による、今も東ウクライナ住民が抵抗している、クーデタのことは言わなかった。ロシアは彼らの調査に協力した。しかしアメリカは、個人生活のほとんど隅々まで見つけることのできる、監視技術をもっているにもかかわらず、ロシアのウクライナ“侵略”の一片の証拠すら出せないでいる。

これはオバマが、ウクライナについて無知のふりをしたのか——稚拙な試みだが——それとも、ウラジミール・プーチンが半時間後の国連演説で言ったように、大掛かりの自己欺瞞なのか、どちらかだ。

オバマは、ウクライナ人は西側が気に入っているのだと言った。それはウクライナの西側ではそうかもしれないが、国全体についてそうではない。更に、アメリカはウクライナに「経済的関心はほとんどない」と言ったが、これは嘆かわしい無知か、堂々たるウソである。モンサント社は大きな関心がある。さらには、バイデンの息子ハンター・バイデンと、ジョン・ケリー家族の友人が **Burisma** ホールディングスの重役になっており、これはクーデタの直後にできた、ウクライナ最大のガス会社だ。

しかもこの国の財務大臣はアメリカ人の **Natalie Jaresko** で、彼女は就任と同時にウクライナ国籍を与えられた。なぜ、米政府の役人に外国の財務を任せるのだろうか？

ロシアの“侵略”にもかかわらず、オバマは新しい冷戦は望まないと言った——ロシアと中国を包囲する基地だけでよい。南シナ海では「アメリカは領海の主張はしない」と、オバマは言った。ただ、航行の自由を保護し、紛争を平和に、「法の強制によらずに」解決するという、利他的な関心を持っているだけだ。しかし、国際法廷が 1980 年代に、アメリカがニカラグアの港の鉱物採掘をするのを違法と裁定したとき、アメリカはこれを無視した。

シリアについては、オバマ（とヨーロッパの彼のパートナーたち）は、バシヤール・アル・アサド大統領は退陣しなければならないと言った——あたかもそれによって、ISIS が武器を置くかのように。「現実には、…アサドから新しいリーダーへの管理された移行を要求しており、連合政府ができて、シリアの人々が再建に取りかかれるように、この混乱に終止符を打たねばならないと認めることが必要です」と米大統領は言った。

オバマの前提は、新しいシリアのリーダーが戦闘中止を宣言すれば、ただちに戦争は終わるというものである。そんなことはない。ISIS はアサドを倒すだけでなく、誰だろうとアサ

ドに代わる者からダマスカスを奪うために戦っている。彼らは首都が欲しいのだ。その首長が誰であるかは問題でない。

プーチンの主張は、アサドの軍隊が、この恐ろしい集団に対しては（クルド族とともに）最も有効な地上軍であり、ISIS の敗退を願うすべての国家は、アサドと共に戦うべきだということである。「反ヒトラー連合軍と同じく、それは、ナチスのように、悪と人間への憎しみの種を蒔く者たちに立ち向かう意欲のある、あらゆる人々を団結させることができる」と、プーチンは言った。

これが最も現実的な方法だが、3年間もアサドの追放を叫んできた西側のリーダーにとって、コースを逆転させることは政治的にむつかしいだろう。それどころか、西側は、それはロシアが、シリアに軍事力を築こうとする“野心”だと非難し、シリアを助けてこの集団を敗退させようとする動きとは見ない。そもそもこの天罰のような集団は、一つには、西側がテロリストといちゃついているうちに、フランケンシュタインの怪物になったものだ

「イスラム国そのものは、どこからともなくやって来たわけではありません」と、プーチンは総会で弁じた。「それはもともと、望まない世俗的政権と戦わせる武器として、育てられたものです。」彼は加えて言った、「過激派集団を操縦して、あなた方の政治目標を達成するために利用し、後で彼らを追い払うか、何とか始末する方法をみつければよいと考える」のは、無責任というものだ。

ロシアは3年前から、こういうことになるかと警告していた。「私は、こういう状況をつくり出した方々に訊ねたい——あなた方は自分のやったことを、少なくとも理解しているのですか？」とプーチンは言った。「しかし、この質問にはきっと答えが出ないでしょう。なぜなら、この人たちは、傲慢、例外（特権）主義、それに無処罰を基本とする、彼らの政策を決して捨てたことがないからです。」

https://contactmonkey.com/api/v1/tracker?cm_session=83aea5b1-63cf-44d1-9df2-179381224e0c&cm_type=link&cm_link=9ac09153-97de-4277-9844-455a3d089909&cm_destination=http://beta.iol.co.za/dailynews/opinion/why-russia-really-supports-syria-1320809

オバマは、国連に対して、自分は本質的に、その気になれば、世界を吹き飛ばすこともできるのだが、ナイスガイでいたい、そしてロシアと中国との対決については、外交を求める決心をしていると話した。「私は、世界がかつて持った最強の軍隊を率っています」と彼は、静かな会場に向かって誇ってみせた。「そして私は、自分の国やその同盟国を、一方的に、また必要となれば武力を用いて、保護することを躊躇しません。」

「私はきょう皆さんの前に、世界の国々は、闘争や強制という古いやり方に戻ることにはできないと、心から信じて立っています」と、オバマは言った。「我々は後ろを振り返ることはできません。」オバマは、むしろ、鏡を覗いてみるべきである。

(ジョー・ローリアは、1990年以來、国連に本拠をおく、古参の外交問題ジャーナリスト。ボストン・グローブ、ロンドン・デイリー・テレグラフ、ヨハネスブルグ・スター、モントルオール・ガゼット、ウォールストリート・ジャーナル、その他の新聞に書いてきた。連絡先は、joelauria@gmail.com ツイッター @unjoe で動向がわかる。)